

# 変える・守る・育てる・創る

第43回

## 女だから経営論

取材・文 三好 かやの



國分俊江さん (福島県・大玉村)

國分農場(有)  
〒969-1302  
福島県安達郡大玉村玉井字小高倉82  
TEL0243-48-3888 FAX0243-48-2902

### Profile

こくぶ・としえ 1974年福島県二本松市生まれ。神奈川工業大学で工業化学を学ぶ。父俊作氏の経営する國分農場は、肉牛の肥育を中心に堆肥製造、水質浄化剤「みね丸くん」の製造販売、さらに「コクブ式生命活性化液システム」「コクブ式コンポストシステム」のシステム販売と、多岐に渡る事業を展開。大学卒業後は農場の仕事に従事。研究主任として活躍。今年の5月から地元の岳温泉旅館協同組合、二本松市有機農業研究会のメンバーとともに立ち上げた環境リサイクル事業「一匁一品」にも積極的に取り組んでいる。

### 研究主任はクレーム隊長

福島県大玉村にある國分農場(有)の堆肥プラントを訪れた。奥の牛舎では牛たちが静かにエサを食み、手前の堆肥場では、攪拌機が堆肥を混ぜ込みながら少しずつ動いていた。

そこへ一台のトラックがやってきた。荷台に積まれたポリバケツから、次々と生ゴミが投げ込まれる。近くのオートキヤンプ場「フォレストパーク」から出たものだ。スイカの皮、メロン、食べ残したご飯やそうめん……。キャンプ場で夏休みを過ごした人たちの置き土産らしい。

「残飯は出てから1日以内の野菜のもとの。いい堆肥を作るには、新鮮な生ゴミが必要なんです」と、研究主任の國分俊江さん(26歳)。

いた國分農場に、生ゴミが持ちこまれるようになつたのは、今から3年前のこと。問題は、生ゴミの鮮度と水分、そして何より「分別の徹底」である。「金属のスプーンやフォーク、ビニールのしよう油袋……一度入れ歯が入つてたこともありました」

こうした分解しきれない素材を取り除くのは、農場段階では至難の技だ。生ゴミの「製造元」である温泉宿やキャンプ場に、分別の徹底を促すのも「研究主任」の役目である。

「一度わかつてもらつたつもりでも、しばらくするとまたゴミが入つてきて『うわあ!』最初の年は、その連續でし

た。分別の指導が徹底していない。今はかなりよくなつてきましたけど、なかなか完璧というわけには……」と、まるで「クレーム隊長」のよう。温泉組合と農場の間で板ばさみ。若いのに大変だなあと思つてしまつた。

### 「お父さん」から「社長」へ

俊江さんは、農場の社長である國分俊作氏の四人姉弟の長女として生まれた。「俊作」の子どもで「俊江」だから、てっきり跡取り娘なのかと思つたが、実は跡取りが継ぐのは「作」の字の方で、三番目の長男、秀作さん(21歳)がいる。彼は、目下現在東京の農業者がいる。彼は、目下現在東京の農業者大学校で勉強中。来年から本格的に農場のメンバーに加わる予定だ。

だから、俊江さんは、別段将来家の仕事を継ぐとか、手伝うとかいうことを意識せずに成長した。

一方、元々二本松市の農家だった國分家は、俊作さんが20代の頃に、隣の大玉村に拠点を移し、大規模な養豚を開始。84年の大雨をきっかけに豚から牛の肥育へ大転換。それも高級な銘柄牛ではなく、「安い牛を安いエサで飼い、安く出す」がモットー。それと並行して「農家の人に喜んで使ってもらえる堆肥」の開発にも取り組んでいた。

糞尿処理の良いを消すために、イオン水、バイウォーター、電気分解……あらゆるものをしてみたが、どうも納得がいかない。専門家にいろいろ聞きながら現場で試行錯誤を繰り返すうちに、俊作さんは水質浄化剤のセラミックボール「みね丸くん」を独自に開

発する。

みね丸くんは、「海洋腐食質から選鉱した天然無機質源を主原料とし、焼成ゼオライト、Ca置換型ゼオライト等を混合して焼成されたセラミック」とのことだが、詳しい製造工程はあくまでも「企業秘密」。今でも家内制手工業で作つている。

当初俊作さんはこの「みね丸くん」を、家庭の浄水用に販売していたのだが、ある時、消費者のご婦人たちを前に、みね丸くんを使って作られた堆肥、そこから生まれた農産物がいかに優れているか説いたところ、「そういう食べ物を待ち望んでいます」との声が返ってきた。それをきっかけにみね丸くんを使った「コクブ式生命活



オートキャンプ場「フォレストパーク」から生ゴミの搬入。利用者にも分別の徹底を促している

俊江さんは、微生物の研究が嫌いではなかったので、一時大学院に進むことも考えたという。「でも、研究室と現場では、ずい分違うことをやっているなあと。勉強はもういいや。家に帰つてうちの仕事を手伝おう」

無菌の研究室や試験管の中で実験を繰り返すより、いろんな微生物がゴチャマンと生きている「土の現場」で働きたい。今、研究室と現場の乖離を感じているのは、彼女だけではないようだ。

俊江さんは、「お宅のお父さんは工学博士なの?」「いえいえ、ただの農家のオヤジです」とにかく自力で画期的な農業資材を編み出し、さらにそれを活用するシステムを農家に還元していく——農家から、農場へ、そしてノウハウを開発・販売する企業へ——俊江さんは、そんな農場と一緒に大きくなってきたのだ。

俊江さんは、微生物の研究が嫌いではなかったので、一時大学院に進むことも考えたという。「でも、研究室と現場では、ずい分違うことをやっているなあと。勉強はもういいや。家に帰つてうちの仕事を手伝おう」

いろいろ考えたら、大学院よりも、他の会社よりも、自分の家の方が面白そうだった。かくして俊江さんは、卒業とともに父を「社長」と呼ぶようになる。

性化液」のシステムを開発し、農家に販売するようになる。最近ではさらに、この生命活性化液を使つた「コクブ式コンポストシステム」も開発。すでに北海道の2カ所の農場で導入されている。「私が販売するのは、機械が3割。あとは現場でシステムが順調に稼動するための技術相談と指導。ソフト面が7割と考えています。資材を売つたらそれでおしまいということはない。気温の低い北海道でも順調にコンポストが稼動するのには、そういうわけです」(俊作さん)

俊江さんに聞いてみた。

「お宅のお父さんは工学博士なの?」「いえいえ、ただの農家のオヤジです」とにかく自力で画期的な農業資材を編



やっぱり分別しきれない。紅茶パック、プラスチックのわさび受けなど

「単に生ゴミ処理のためではなく、生ゴミが有効な資源だという考え方でやつてくれるなら協力する」

俊江さんは、「二本松市有機農業研究会」のメンバー18名が國分農場の堆肥を使って野菜を作り、その野菜を使った料理が旅館で提供される……こうしてリサイクルの輪が繋がるという取り組みだ。有機農業研究会から出荷された野菜は、それぞれの温泉宿で調理され「一旬一品」と名づけられ、他の料理と共に提供される。今年の5月にスタートしたばかりだ。

協力農家の大内信一さんを訪ねた。無農薬の有機栽培を志して20年。主に消費者の共同購入を中心に行き野菜を販売してきた。この日出荷していたニンジンは、ドロつき無選別で袋詰めにされていて、キュウリやトマトは、苗の時期以外はハウスをかけ露地で栽培している。旅館の厨房ではそれまで市場や八百屋を経由して、色々な野菜を扱つていた

菜を旅館に運び込んで宿泊客をもてなすというものの、業種の枠を越えた生ゴミリサイクル事業である。

きっかけは、地元の広域行政組合に委託していた生ゴミ処理費が98年4月から一挙に2倍近くに値上げされたことだつた。

これによる経費負担を軽減すべく、岳温泉旅館協同組合の理事長鈴木泰二氏が、國分農場に生ゴミ処理を依頼してきたのである。俊作さんは、

大内さんにとっても温泉とのつながりは、初の試み。まだ始まつたばかりでお互い手探りの状態のようだ。でも、「うちには大豆も作っているから、それを豆腐にして旅館のお客さんに食べてもらえば……」

さらに俊江さんの役割に對しては、「我々ぐらいの年になると、岳温泉とは長い付き合いがあるんで、はつきりものがいえない部分もある。むしろ若い彼

の方が、仕事のことはきつちり言える。その点はいいと思う



岳温泉の旅館「扇や」で提供されている「一匁一品」の料理。この日の一品は右手前「夏野菜のゼリー寄せ」

「私は國分農場でも、農家さんでも、温泉街でも、一番年下で下つ端なんです。だから今はとりあえずパシリをやつていなさいと。そういう感じないです」

「口も腰も重いおじさんの代わりに走り回る。生ゴミの出し方ひとつに

ても、社長や重役クラスが口を挟めば、一大事になるところ、パシリが言つこと

で「しようがないなあ」ですまされる。

一生やつてゐるつもりはないが、今はパシリに徹しよう。俊江さんの話からそんな自負が伝わってきた。

「何ですか、これ?」「ワサビを乗せるやつ。よくお刺身の横

女の方が、仕事のことはきつちり言える。その点はいいと思う

つまり、オヤジ同士で「なあなあ」になりがちなところを、若い俊江さんが介在することで、ビジネスライクにきつちり割り切つて話が進んでいく。案外こういうのつて大事なことだと思う。

きつちり言える。その点はいいと思う

### 真の「循環」に必要なもの

再び國分農場。発酵した堆肥の山を手

でほじくると、丸くて小さいオレンジ色

のプラスチック片が出てきた。

「何ですか、これ?」「ワサビを乗せるやつ。よくお刺身の横

でほじくると、丸くて小さいオレンジ色のプラスチック片が出てきた。

「行政は生ゴミ堆肥化を、美しく推奨しているけれど、結局ゴミを処理できればいい。でも、堆肥は農家がメリットを上げられる商品にしていかないと。結局物の循環だけでなく、経済の方もちゃんと

回つていかないとダメなんですよね」

行政や旅館にとつては「廃棄物」でしかない生ゴミを、再び農家が利益を上げられる「商品」に変えてしまう。まるで魔法のような仕事だ。

彼女のように若くてやる気があって、さらに専門知識も備えている。そんな人

がいなければ、眞の意味で「循環の輪」は繋がつていかないのだと思う。

取材当日、たまたま帰省して農場を手伝つていた跡取り秀作さんに聞いてみた。

「スゴいお姉さんだねえ」「せっかく専門知識もあつて、仕事も先に手伝つてるんだから、いきなり遠くに嫁に行つたりしないでほしい」と、頼りにしている様子。既に農家の域を越えて、企業として前進し始めている國分農場を背負つて立たねばならない。自由な選択肢の中から実家を選び取つた俊江さんとは対照的に、秀作さんはかなりのプレッシャーを感じている様子。「今のうちに遊ばなきゃ」とも。これは業種を問わず家業を背負つた若者からよく聞くフレーズ。ハチヤメチャできる時間は限られている。

「姉ちゃん」の存在は心強い。一方父で

「専門知識があるのだから、現場の実情

を踏まえた上で、それをみんなにわかりやすく伝える役目を果たしてほしい。これからまたわからない現象が出てくるこ

ともあると思うが、みんなで力を出し合つて、よりよいものを作つていきたい

として一言。

「汚いことをやらないと、本物はわから

ない」

そんな父の期待を知つてか知らずか、

若き研究主任は、よりよい堆肥の製造

目指し、日々堆肥の温度管理と生ゴミチ

エックに励んでいる。